
ヒトノス ~The World Travelers~

周防環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトノス 〜The World Travelers〜

【Nコード】

N9050N

【作者名】

周防環

【あらすじ】

世界中をローダーで旅する少年二オ。相棒のエドと共に今日もどこかの空の下に行く。ある街に辿り着いた二オとエドは補給と買い出しをすることに。しかし、街の中には人の姿が見当たらずに……。

冒険とファンタジーの世界を旅する少年の物語です。

辺りは暗闇に包まれている。大樹に遮られ光は届かず。星も、月も、空さえ見えない。時々、木々の隙間を駆け抜ける一陣の風だけが、さびしさを泣いている声のように聞こえてくる。夜の森の中だった。太い木々が何本も何本も空に向かって伸び、枝と葉で隠され、空は見えない。昼間なら木漏れ日で鮮やかな緑色に見えるだろう葉も、今は黒く不気味なものとしか目に映らない。地面から顔を出している根のそばで、たき火の炎が揺らめいていた。その炎が作る明かりの中、少年は毛布にくるまるように体を丸めて、少年より大きく太い根に寄りかかって目を閉じていた。その近くにはフォーローダー（四つの車輪で地上を走るものを指す。略してローダーとも言う）が停まっている。ドアにたき火の炎がちらちらと映っていた。

「どうだろうな。まあ、たぶんだけど……」

唐突に話し声が聞こえた。少し高い声だ。

「たぶん、なんだ？」

また別の声が伺うように聞いた。別の声は、先程とは対称的な低い声だった。少しの間をとって、高い声の主が静かに話した。他人に説明するように、それでいて独り言をつぶやいているかのような口調で。

「オレはさ、自分の欲望っていうのかな、それに忠実な人間なんじゃないか？　そう感じることもあるんだ。危険と隣り合わせの冒険をしてみたい、レアな宝を手に入りたい、もっと綺麗な景色を、もっと世界を見てみたい、その欲望に従って旅行をしているような気がする」

それから少し静寂があつて、こう続けた。

「餓死、戦死、毒死、病死、事故死、旅行をしている以上、こういう死はいつもオレの隣にあるものだと思うてる」

「まあ、そうであろつな」

「でも、オレは一度も旅行をやめようと思ったことはないんだ。遺跡に入った時のスリル、レアなお宝を見つけた時の満足感や達成感、絶景を見たときの感動、なにより、毎日が楽しいからね」
「なるほどな」

高い声の主はそう言い切った。そして尋ねた。

「こんな感じでいいかい？」

「正直、我には理解しかねるな」

低い声の主が答えた。

「いいんじゃない？価値観なんてそれぞれなんだから」

「そういうものか？」

「そういうものだよ」

「うゝむ」

「それじゃ、オレはそろそろ寝るよ。明日はまた長いこと走らなきゃいけないからね。おやすみ、エド」

「すまぬな。ゆっくり休むといい、二オ」

闇に布がする音が吸い込まれていき、それが寝息に変わるまでそう時間はかからなかった。

茶色の海の中に、一筋の線が延びていた。それはコンクリートを雑に固めただけの道で、東に向かって真つすぐ走っている。目の前には、草一本生えていない不毛な荒野が広がっていて、時折強い風に吹かれて土煙を上げている以外は何も見えない。そんな荒れた大地を走るコンクリの道を、一台のフォーローダー（四つの車輪で走る乗り物全てを指す。略してローダーとも言う）が走っていた。後部座席には、荷物がぎっしり詰まった肩掛けのスリーウェイバックが無造作に置かれている。ローダーは低いエンジン音を響かせながら、かなりのスピードで走っているが、たまに荒れた地面にハンドルを取られて左右に蛇行しそうになる。そのたびにドライバーはあわててハンドルを切って、進路の修正をした。ドライバーは、年の頃にして十代半ば、黒髪蒼眼、首から下げた銀色のペンダント、黒

い靴、黒いズボン、黒いジャケットくらいしか特徴と言えるものがない、ほぼ全身黒ずくめの少年だった。助手席には、使い込まれた蒼色の剣帯が置かれていて、通常よりも刀身の短い刀が二本差さっている。剣帯には後ろ腰の部分に小さめのウエストバックが付いていて、バッグの口から食べかけの携帯食料が顔を出している。少年は大きい瞳に、整った端正な顔付き、表情に十代の幼さを残しているものの、今はどこことなく疲れた顔をしていた。ローダーのインパネ部分に設置されたモニターから伸びるコードが、首から下がっているペンダントにつながっている。そのモニターには子供の落書きのような線三本で描かれた顔が映し出されていて、それがドライバーにこう言った。

「我には二才の考えが読めん。なぜに目の前に街が見えるのに携帯食料などを食しておるのだ」

二才と呼ばれたドライバーはこう言い返した。

「腹が減っては戦ができぬって言うたろ」

彼らが進むコンクリートロードの先に、街特有の高い外壁が見えていた。

「それに携帯食料にも消費期限はあるんだ。期限が過ぎて食べられなくなる前に食べなきゃもったいないじゃないか」

得意満面な表情で言い切った瞬間、タイヤが路面のうねりにはじかれてハンドルを取られそうになり、再び蛇行しそうになった。二才があわてて修正する。

「うおお!？」

「おっと、ごめんエド」

二才はさすがに少し速度を落とした。エドと呼ばれたモニターの顔がぼやく。

「油断しているからだ、バカ者が。それよりもあの街に食料があるとは限らんぞ。人がいなくなったらどうするつもりだ？」

「うゝん、それは考えてなかったな。まあ、その時は……」

「その時は？」

「なるようになるさ」

門の前までたどり着いて、二才はローダーを停止させた。魔物除けの高い外壁の前には、念のためなのか深い堀があり、跳ね上げ式の頑丈そうな橋が下りていた。二才は門の横にある建物に目をつけてローダーから降りようとした。ドアを開けた途端にローダーが前に動き出して、二才は自分がサイドブレーキを引いていないことに気がついた。あわてて車内に戻ってがちゃりとサイドブレーキを引く。「降りるときにサイドブレーキを引くのは常識であるう。堀にでも落ちたらどうするつもりだ！」

エドが心底あきれた様子で言う。

「忘れているのはサイドだけではないぞ。ギアは今どこに入っている？　ちゃんと降りるときはサイドを引いてギアをパーキングに入れるといつも言っているだろう。それだけではない、お主車内で食事を摂るのはよいがシートにこぼし過ぎだ。もっとローダーをいたわる気持ちを持てと日頃から言っているのにお主というやつは全く聞かん。だいたい、運転も荒い。制限速度がないとはいえあんな路面が凸凹したコンクリの道をローダーの最高速度で走るなど自殺行為の何物でもないのだぞ。スピードは出せば出すほど些細なミスで事故につながるということをきちんとわかって……。二才、聞いているのか？」

建物の中に人はいなかった。人の代わりに円形の台のような機械が床と天井に置いてあった。それは二才が乗ると同時に作動し、機械的な感情の無い声で質問して、あつという間に殺菌を終わらせて開門の許可を出した。門が重そうな音を響かせて開いた。

「もう終わったのか」

戻ってきた二才にエドが聞いた。

「うん」

二才はローダーに乗り込むと、キーを回してエンジンをかけた。

「どうかしたのか？」

「門前の警備小屋なのに人がいなかった」

ニオはローダーを発進させ、門をくぐる。

「これは、不安が的中したのかもしれない」

エドが疲れたように言った。

「腹は膨れたか？」

「まあね」

ニオは満足そうに答えながら、お店の前にある駐車スペースに止めたローダーに戻ってきた。

「どうだった？」

「ダメだね。誰もいない」

ローダーに乗り込んだニオはそう言っ、シートベルトをがちゃりと締めた。そして辺りを見回した。

対向車線を含めて六車線の太い道路がどこまでも延びており、両脇に高い建物がいくつも建っていた。今ニオが出てきた建物には『海鮮レストラン シースプーン』と看板が出ていた。通りには広い歩道もあり、街灯が規則正しく並んでいた。おそらくこの街のメインストリートなのだろうと思わせるほどに道はまっすぐ進んでいる。

だいぶ先に信号機が一つ見える。さらに先には、森がぼんやりと見えた。後ろには先ほど通ってきた門が見えて、その左右は高い建物に隠れてはつきり見えないが、かなり先まで続いているようだ。ここから見るだけでも、この街が広大で、ひたすら平坦だということがわかる。

「誰もいないのに料理が出てきたのか？」

「うん。ここでも機械がやってくれた。けっこ美味しかったよ」

「機械だけとは、随分と奇怪な街だな」

ご飯を食べる少し前、ニオとエドが街に入ると、そこには誰もいなかった。街は立派で、隅々までよく整備されている。しかし、それ

を行っているはずの人の姿はどこにも見えない。そこに一台のフォードローダーが走ってきて、二オのローダーの横で停まった。窓が開いて、その中に人はいなかった。代わりにモニターが伸びてきて、歓迎の挨拶を適当に表示した後、街の地図情報が入ったメモリーコネクタを差し出してきた。二オは自分のモニターにメモリーコネクタを接続して地図情報をダウンロードすると、それを機械に返した。その後、ローダーは窓を閉めてどこかに去っていった。二オはとりあえず、タッチパネル式のモニターを操作してレストランを探すと、近くにそれらしいお店を見つけて、一人で入って言った。店内はきれいに清掃整備されていたが、誰もいなかった。二オを出迎えたのは、機械だった。席に座るとテーブルから水とタッチパネル式のメニューが出てきた。水はひんやりとしていて渴いたのを適度にうるおしてくれた。メニューを開くと内容は割と普通だった。二オは霜降り海老とサーロインキノコのパスタ（チョモランマ盛り）とオオシヤクレワニのステーキ（五キロ）と採れたて新鮮山菜サラダ（大）とフルーツのてんこ盛り合わせを注文した。しばらくすると機械によって料理が運ばれて、二オはそれをぺろりと平らげた。機械にお金を払った。全部で350円だった。そして、機械に見送られて店を出た。

二オは再びモニターを操作して、ローダーの燃料を補給できるところを探し、ギリギリだったがなんとかそこまで走って行った。相変わらず人は見かけない。途中で走っている車を見つけて追いかけてみたら、無人のタクシーだった。誰もいない燃料スタンドで、二オは残量がゼロになったローダーの燃料タンクに燃料を入れた。全部で120円だった。今度は今日の寝床を探す。安ホテルを見つけて行ってみると、そこには誰もいなかった。

見た目はとても安ホテルには見えなかった。豪華な装飾が外にも中にも施されていて、清掃も隅々まで行き届き、磨き抜かれたロビーの大理石の床は輝いていた。フロントにはカウンターがあるものの

無人で、ボタンが付いた大画面モニターがあるだけだった。大画面モニターには部屋の画像が映し出されていてボタンを押せばその部屋に宿泊できるシステムになっていて、まるでラブホテルのようなシステムだった。ボタンの横に値段も映し出されていて、一部屋平均500円くらいだった。やはり無料みたいな値段だった。二才はそこそこ広そうな部屋を選んで、そのボタンを押した。部屋に入ると、今まで見たことがないような豪華な部屋だった。部屋の番号を間違えたのかと思って、何度も何度も部屋番号を確認した。

「他に宿泊客はいないのだから間違っていたとしても関係あるまい。それに、部屋番号は間違っていないぞ、初心者め」

エドがぼそつと言った。二才は旅の疲れを癒そうと、無駄に広いバスルームでシャワーを浴びて、服を着替えた。着ていた服を洗濯しようとして、ホテルにクリーニングサービスがあることに気づき、頼んでみた。機械が取りに来て、明日にはできると言って去っていた。二才とエドはローダーから外してきたモニターにダウンロードしたばかりの地図を表示した。今はペンダントにコードを接続していないため画面に三本線の顔は映し出されていない。今いるホテルは、入ってきた街の入り口から一番近い『西区・ショッピングストリート』と書かれたエリアにある。街は広大で、先ほど二才達が走ったのは街の隅にしか過ぎなかった。

街の中央部には『中央区・ガヴァメントエリア』と赤色で表示されたエリアがあり、東には蒼で塗られた『東区・ナチュラルエリア』、北には黄色で塗られた『北区・ファクトリーエリア』、南には翠色で塗られた『南区・ホームエリア』があった。その中で、南区のホームエリアは特に範囲が広く、街の四割がそれだった。

「人がいるようだな」

「そりゃ、これだけの機械が動いているんだから、それなりの人数はいるだろ。少なくとも、この前見たいに動物しかいないってことはないと思うよ」

「それならば、なぜ一人も見かけない？」

「そうだな、この街の人はみんな一日のほとんどを寝て過ごしているか、太陽の光を浴びることができないヴァンパイアか。まあなんにしろ、家から出られない特別な理由があるのかもしれない」
「ということは、人がいるとすればホームエリアということになるな」

「おそろくね」

「ならば行ってみるとしよう。二才とここで考えていても始まらない」
エドが移動を提案したが、二才は首を横に振って、

「今日はもう行かないよ。だいぶ日も落ちてきたし、街の中といつても危険がないわけじゃないからね。それに……」

「それに、なんだ？」

「お腹すいたし、なにより眠い」

「食事なら済ませただろ。それに、いつもならまだ起きている時間ではないか」

エドがそう言った時には、二才は腰に巻いた蒼い剣帯をはずして、上着を手に持ち、ベッドに向かっていた。

「そうなんだけどさ、なんだかこのふかふかのベッドを見ていたら眠くなってきたやつて……」

二才はそれだけ言うと、剣帯と上着をベッド横に置いてあつたイスの背もたれに掛けた。そして、どさつとベッドに倒れこんで、おやすみ、と小声で言つてすぐに寝てしまった。

「仕方の無い奴だ」

エドがぼそつと言った。

翌朝、二才は夜明け前に目を覚ました。部屋のポストに、昨日頼んだ洗濯物が入っていた。汚れがすべて洗い落されて新品のようになっていた。二才は二本の刀の手入れを始めた。柄頭に白い紐が結ばれた一振り、二才はこれを『シロ』と呼ぶ。舞い散る白い桜が柄に掘られている刀だ。刃挽きされた鉄刀であるため殺傷能力は低いが、材料に鋼樹を使っており、硬度は他に類をみないほど飛び抜けてい

る。二才は『シロ』を鞘から抜き、拭い紙で刀身の油を拭き取り、打粉で刀身をぽんぽんと叩いた。最後に刀身に新しい油を塗ってもう一度鞘に納める。柄頭に黒い紐が結ばれたもう一本の刀、通称『クロ』は恐ろしくよく切れる一振りだ。羽のような軽さと風刃のよくな鋭さを併せ持っている。二才は『クロ』の手入れを済ませて、何度も素振りと型の訓練をした。

その後、シャワーで汗を流した。一階のレストランに行くと、バイキング形式の食事がテーブルにずらりと並べられていた。機械が二才の方に寄ってきて、これ以外にも要望があれば何でもご用意いたします、と言った。

二才はとりあえず、優に二十人分はあろうかという食事を全て平らげると、部屋に戻ってきた。食べ過ぎのあまりしばらくベッドから動けなかった。そして太陽がある程度まで上がった頃、二才はエドを起こした。ローダーに荷物を詰め込み、ホテルをチェックアウトした。そしてモニターのナビゲーション・システムを見ながら、『ホームエリア』に向かった。

『ホームエリア』は、太い木々が茂る森のような場所だった。川が流れ、小動物の鳴き声が響き、空気はおいしかった。舗装はされていないがそこそこ広い土の道を、二才はローダーで走っていた。そして、道の所々に家はあった。造りが全て同じ家屋で個性はなく、どの家も共通して隣家までの距離がかなり離れていた。二才とエドは、誰かと会えるかと森の中をローダーで走った。そして、誰にも会えなかった。二才は家の前でローダーを停めてみた。廃屋であれば独特のうすら寒い空気が流れているものだがここにはそれがない。しかし人が住んでいる温かみのある空気が流れているというわけでもなかった。しばらく見ていたが、人の姿は見えなかった。あまりその場において変質者として通報されても困るので、二才はローダーを発進させた。しばらく走ると、結局誰とも出会ったことなく街の中心である『中央区・ガヴァメントエリア』に出てしまった。太い木

々が茂っていた森は高いビル群に変わり、道はコンクリートで舗装された走りやすく広い道へと変わる。そして、相変わらず誰も見なかった。動いているローダーを何台か見つけて追いかけてみると、すべてが無人のタクシーか清掃車だった。

二才とエドは、そびえ建つ赤いタワーに入った。エレベーターで最上階へ上がると、街の全域を見渡せる特別展望室があった。二才とエドは、自分達の他には誰もいない、きれいに整備された特別展望室から街を眺めた。遠くの方に街を囲む高い壁が見えて、地図のとおりに『ホームエリア』の緑が広がっていた。周囲のビルを見ても、中に人の姿はない。様々な形状の清掃機械達が慌ただしく掃除をしているだけだった。二才はウエストバックからラン力製の双眼鏡を取り出した。倍率を変えながら、いろんな建物の中を覗き見ていく。

「あまり感心できん趣味だな」

エドがつぶやいた。

「……見つけた。人だ」

二才が双眼鏡を覗いたままで言った。

「本当か？」

エドが珍しく大きい声を出した。

「ホームエリアにある家の前に一人。たぶん男。農具みたいな物を持つてるから畑仕事にでも行くのかな？ 離れた家にも一人。こっちは、女だね。庭の手入れをしてるみたいだ。他にも電気がついてる家がいくつがある」

二才はそこで見るのをやめて、双眼鏡をウエストバックに戻した。

「とりあえず、人はいるようだね」

「そのようだな。先ほども人がいるような雰囲気はあった。しかし、ならばなぜ人と会わんのだ？」

エドの質問に、二才は最下層に向かうエレベーターに乗りながら、

「そこがよくわかんないんだよね」。最初は街の外から来た人間が怖いのかと思ってたんだけど……」

「だけど、なんなのだ？」

「それなら、この街の住人同士で楽しく過ごしているはずだろ？

でも、ここにはそんな形跡はまったくない。それよりもおかしいのは、この街にはゴミどころかチリひとつ落ちていないんだ」

「それは良いことではないのか？」

「エド、考えてみてよ。こんなに大きな街であんなに大きい居住区があるんだよ？　いくら清掃機械がたくさんあるからといっても、カバーしきれるものじゃない。それに、無人のゴミ回収車にも何度か会ったけど、中にゴミはひとつも入ってなかった」

二才は、下るエレベーターの中からもう一度街を見た。無人機械によつてきれいに清掃・整備された街並み。天然の自然に囲まれた居住区。街としての機能や清潔さは、今まで見てきたどの街よりも優れていた。

「もしかしたら、ここは……」

二才が小声でつぶやいた。

それから二才とエドは、『ファクトリーエリア』まで走って、工場を見学した。しかし、工場はきれいに清掃されているものの、完全に沈黙していた。長年起動していないようだった。夕方、辺りが暗くなり始めたところに、二才とエドは昨日泊まったホテルに戻ってきた。別のホテルを探したのだが、どうやらホテルはこの『シヨッピングストリート』にしかないらしい。そのために、わざわざ街を半周して西区まで戻ってきた。その間も、誰かと会うことはなかった。

翌朝、二才はまたしても朝食を二十人前近く平らげた。ローダーの燃料を補給し、携帯食料と保存食を大量に買い込むと、東区の『ナチュラルエリア』に向けて南の『ホームエリア』を突っ切るように走り始めた。東のゲートから出発するつもりだった。早朝の森林にローダーの低いエンジン音が響き渡った。二才は居住区ではあまり大きい音をたてたくなかったが、こればかりはどうしようもなかった。なるべく音をたてないようにアクセルを一定に保って、ゆっく

り走っていった。二才は、森の中に家が見えるたびに庭や玄関、窓などを覗いてみるが、人の姿は認められない。しばらくすると『ホームエリア』を抜けて、山や湖のある『ナチュラルエリア』に入った。湖のそばの土の道を走り続けると、湖畔に開けた場所を見つけ、二才はローダーのエンジンを切って停止させた。太陽もいい角度まで昇っていたので、二才はここで昼食を摂ることにした。ローダーの後部座席から、出掛けに買ったシンデレラ牛のローストを羽衣レタスで挟んだサンドイッチを三十個ほど引っぱり出す。辺りには様々な鳴き声の鳥や小動物が集まってきて、まるで動物達の演奏会のようになっていた。二才はサンドイッチのパンを、時折千切っては分け与えた。昼食を摂った後、二才はローダーのエンジンをかけようとした。その時、がちゃがちゃと人工物を動かす音が聞こえて、二才は辺りを見回した。茂みの奥に、隠れるように建っている一軒の家があった。居住区の家と違い、この家は木造だった。庭はきれいとはいかないまでもそれなりに整備されている。家屋の横には小さい小屋が建っており、そのそばで一人の男がしゃがんで、小さな機械をいじっていた。エドが小声で、

「街に着いてから、初めて人間を見たな」

珍獣でも見つけたかのように言った。二才とエドはローダーから降りてこっそりと近づいた。そして、声をかけた。

「こんにちは」

「うわぁ！」

男が飛び上がって驚いた。二才とエドに振りむく。二十代後半の、金髪の男だった。彼の顔には、まるで見てはいけないものを見てしまったかのような驚愕の表情が浮かんでいた。そして、口を開いた。

「あ、あ……ああ……」

男は驚きのあまり、しゃべれなかった。

「大丈夫ですか？ いきなりですみませんでした」
二才が言った。

「あ、ああ……あう……あい……」

男の言葉は意味どころか文章にすらなっていないかった。エドが、

「二才、この街の者は我らとは言語が違うのではないか？」

「ああ、なるほど。えーっと、ジャパニクスは話せますか？」

「あ、あなた達は……」

男がなんとか声を喉から絞り出すと、エドが、

「なんだ、話せるではないか」

「あ、あなた達は、人間ですか？」

男が二才とエドを指さしながら、そう言った。

「我はどう見ても違うと思うが」

エドが即答した。二才は首を傾げた。すると男は驚いた表情をみるみる回復させた。普通の顔を通りこして、嬉しくて仕方がないといった顔になった。そして確認するように大声で質問した。

「あなた方は、本当に人間なんですね？」

「オレは、そうですね。エドはどう見ても人間には見えませんが、というか、質問の意味はわかりますが、質問の意図がわからないんです」

二才が冷静に言った。それを聞いた男は、更に興奮した様子でたたみかけるように言った。

「そうですね！ 人間ですよ！ あ、唐突ですいません。私にもあなた方が人間に見えます！ あなた方から見て私は人間に『見え』ますか？ あ、もしお時間があるなら一緒にお茶でもいかがですか？ それとももう出発ですか？ 是非とも一緒にお茶しましょう、そうしましょう！」

「時間はありますから、かまいませんけど。よかつたら、この街の住人がどうして人付き合いをしないのか教えてもらえますか？」

二才の質問に男は小躍りしながら走り寄ってきて、大声で叫んだ。

「喜んで！ 何でも話してあげるよ！」

二才とエドは、テラスへと案内された。木のテーブルとイス。庭先から見える景色はなかなか綺麗で、動物達がじゃれ合い、小鳥が

鳴いて、ほのぼのとした空気が流れている。庭の端には、きれいな花やハーブの鉢植えがいくつも並んでいた。家には他に誰かがいる気配はなかった。二才は庭が見渡せる方のイスに座った。エドはいつもと変わらず、二才の首から下がっている。

「どうぞ」

男がティーカップをテーブルに置いた。

「庭の菜園で採れた草で作ったお茶なんだ。お口に合うといいんだけど」

二才はお茶の香りをかいだ。

「いい香りです。なんていうお茶ですか？」

「紅茶っていうんです」

それを聞いたエドが思わず叫んだ。

「ほう、紅茶とは珍しい」

二才はティーカップを覗き込んで、それから男に確認するように聞いた。

「紅茶？ 聞いたことないけど、初めての人が飲んでも大丈夫ですか？」

男はくすくすと笑いながら、

「あなた方は本当に旅行者なんですね。笑ってしまつてすみません。紅茶っていうのは、今でこそ限られた場所でしか採れなくなつてしまいました。昔は誰もが好んで飲んでいたお茶なんです。まあ、初めて見た物っていうのは飲みづらいですよ」

「紅茶も知らんとは、情けない主だな」

エドが心底呆れたような口調で言った。

「仕方ないですよ。紅茶が栽培場以外で採れなくなったのは、もう五十年も前の話ですから。しかしながら、エドさんはお茶にお詳しいようですね！ 実は他にもあんな物やこんな物が……」

「こ、これはすごい！ 我に肉体があつたら是非とも飲んでみたいものだ。おや？ これは……」

「ああ、それはですね……」

「な、なんと！ では、こちらは……」

「それは……」

そうして、男とエドのお茶談議は花を咲かせ始めた。傍から見たら何ともじじくさい光景だった。しばらくして、二才が言った。

「あの、そろそろお話を伺ってもよろしいですか？」

二才の問いに男は謝りながらあわててイスを向けた。どうやらお茶話に夢中で忘れていたらしい。

「す、すみません。こんなに楽しいお話を誰かとしたことがなかったもので……。なぜこの街の住人が人付き合いをしないのか、でしたね。ご説明します」

男の顔から和気藹々とした雰囲気が消えた。二才の顔を見て、ゆっくりと息を吐いてから、男は話し始めた。

「そうですね……。簡単に言ってしまうと、ここに、人と呼べる存在は一人も住んでいません。だから顔を合わせないんです……。いや……。合わせる意味がないんです」

「人と呼べる存在が、いない？」

「どういうことだ？」

男は少しだけお茶を飲んだ。

「あなた方も、思ったことはありませんか？ もっと楽に生きたいって。仕事なんかしないで、自分のやりたいことを自由にやりたいって」

「まあ、まさに今がそんな感じですけど」

男の問いかけに、二才が冷静に答えた。

「この街の人間も本気でそう思ったんです。昔はこの街の機械なんでもっと少なくて、今以上に自然が豊かなところだったんですけど…… ある時、人間ができることならプログラムすれば機械にも同じことができるんじゃないかと考えた学者がいたんです。そして彼は様々な機械を開発していった。あなた方も見たでしょう？ 街を際限なく清掃する機械を、客のいないレストランで料理を作り続ける機械を、人のいない街を迷走する無人タクシーを。街の人達は自分の

仕事を代わりにやってくれる機械が増えていつて、大変喜びました。そしてある日、自律機械を研究していたその学者が、ある画期的な発明をしてしまった……。その発明とは、機械に人間を分け与えて、街のすべてを任せてしまおうというものでした」

「機械に人間を分け与える？」

二才が怪訝そうな顔で聞いた。エドも、

「どうということだ？」

男は話を続けた。

「たとえば、二才さんが今日の晩御飯に魚を食べたいと思います。人間を分け与えられた機械は、それをまるで自分が考えたかのように行動するわけです。つまり、自分はふと魚が食べたいと思い浮かべるだけで、自分を分け与えた機械がそれを自動的にやってくれるというものです。いい言い方をすると機械と人間の一体化というやつですね」

「なるほどね」「それはすごいな」

二才とエドが同時に相づちを打った。

「街中の人が素晴らしい発見だと褒め称えました。感覚すらも機械と共有することによって人は何もすることなく、食事や睡眠などの生きるために必要な行為をすべて機械任せで行えるんですから。自らが行う行動という概念を破壊し、新しい生活スタイルを確立できる！……みんなそう信じました。そして街のすべての人間が機械との一体化を望みました。学者は痛みも苦しみもなく簡単に機械と一体化できる方法を探し、それを可能にする機械が完成した。それはもう、あつという間にです。それから、すべての住人がその機械に入って一体化を行いました」

「全員がか？」

エドがささず聞いた。

「全員が、です。みんながみんなと同じ位置に立っていたかったんでしょうね。取り残されるのが怖かったんだと思います」

「ということは、あなたも？」

「ええ、私もです」

二才の問いかけに、男は淡々と答えた。

「……それで、どうなったんですか？」

二才が冷静に聞いた。男は悲しげな表情をして、話し始めた。

「ここから先は実際に街で起きた事実を話しましょう……。私は機械と一体化しました。一体化した次の日の朝、目が覚めると私は朝食を食べていました。自分で作った記憶はない。驚きました、本当に自分が寝てる間はプログラムされた機械が朝食を作って、食べてくれていたんです。しかも、感覚も共有しているためか、味覚などの五感もちゃんとあるんです。ご飯を食べればおいしい、恋人を抱き締めれば暖かい、そういうことを機械任せにしても、自分でやっている様な気になれるんです。今思えばとんだ勘違いですけどね……」

男は一旦話すのをやめて、はぁ、と息を吐いた。

「私達は、いろんなことを機械任せにしました。家事や仕事はもちろん、食事や睡眠までも機械任せにする住民達がどんどん増えていきました。けど、それだけならまだよかった……。ある日、街で窃盗事件が起きました。盗られたのはりんごがひとつ。この街での犯罪は問答無用で裁判になりますので、当然その犯人も裁判所送りになりました。犯人は裁判で、機械のプログラムを間違えた。りんごを取った後に、お金を払うというプログラムを忘れたただけだ、そう言いました。そして、犯人の判決は無罪でした」

「……………」

「裁判所はプログラムに関係する犯罪は無罪という前例を作ってしまった。」

男の顔に笑みが浮かんだ。それは、自らの行いを自嘲するような笑みだった。

「その後はひたすら犯罪と無罪が決まっている裁判の繰り返しでした。みんな生活のすべてを機械任せにした日々の退屈を紛らわせるちょっとした遊びのつもりだったんだと思います。でも、犯罪はど

んどんエスカレーターしていった。初めは窃盗だったものが強盗に、痴漢だったものが強姦に、傷害だったものが殺人に変わった。そして、裁判所はそのすべてを無罪にしまった……。とんでもない笑い話ですよ。普通なら死刑になってもおかしくない罪にもかかわらず、それらが無罪になつていくんですから……。遊びから始まった犯罪がこの街に爆発的に蔓延してしまつて、ほどなくして法や秩序というものは消滅しました。法や秩序に抑圧されなくなった人……いや、その時点で私達は人ではなくなっていたのかもしれませんが、機械との一体化というのは、人間をやめると同義だったんだと思います」

「……………」

「人でなくなつた私達は、破滅に向かつて些細なことから争いを始めたんです。止めるものは何もなかった。止めるために必要なものはすべて消滅していましたから。まさに、地獄のような状態でした」

「それで、その後はどうなつたんです？」

「二才が聞くと、男はそれに素直に答えた。
「それからしばらくして、私はようやく人と機械の一体化という所業の恐ろしさに気がつきました。人は自ら行動することによって、自分の行動に責任を持つことができるんだと、ようやく気づくことができたんです。でも、その時点では何もかもが遅すぎた……。住人に残っているのは、私だけだったから。だから、この街には私以外の住人がいないんです」

「居住区の者たちは住人ではないのか？」

「エドが怪訝そうな口調で聞いた。

「あれは、人型の家政婦機械です。農作業をする機械なんかもいたはずですよ。この街に人はいない。新しい命も生まれたいわけですから、発展もしないし、いずれは私が整備した今動いている機械達も動かなくなつて、ここは滅びることになるでしょう。私はそれを見届けなければならぬ」

男は立ち上がると、型の古いサウンドコンポのスイッチを入れた。

きれいな音が両脇のスピーカーから流れだした。ゆったりとしたクラシックだった。

二才はしばらく聞いて、

「いい曲ですね」

男はそれを聞くと、ほんの少し微笑んだ。

「この曲は機械が発展する前に流行っていた曲なんですけどね。昔は広場で住人達が集まって、よく演奏会を開いていたものです。あの頃が懐かしいな」

そう言つて、男は目を閉じた。しばらくして曲は終わった。

「旅行者の二才さんに言う意味はないかもしれませんが、お氣をつけて」

湖畔に停めたローダーのそばで男が言った。二才はシーベルトを締めてキーを回した。エンジン音が森に響いている。

「ありがとうございます。氣をつけます」

「エドさんも」

「うむ。またお茶について語り合いたいものだ」

「あなた方とお話ができて、とても楽しかった。できれば、もっと早くお会いしたかったけれど……仕方ないですね」

男はそう言つて肩をすくめた。

「紅茶ごちそうさまでした。おいしかったです」

二才はそう言つてローダーのギアをパーキングからドライブに入れた。サイドブレーキをおろして、フットブレーキから足を離し、ゆっくりとローダーは動き出す。二才は男を見た。男は寂しげな笑顔を浮かべて、右手を振っていた。二才は軽く首を傾げた。それから前を向いて、アクセルを少し踏んだ。ローダーが走り去っていくのを、男はいつまでも見ていた。

街を出てからしばらく、草原の道を二才とエドは走っていた。太陽がだいぶ落ちていて、辺りはオレンジ色に染まり始めている。

「どうにも、変わった街だったな」

エドが突然言った。

「ん？ ああ、そうだったね」

「今、何を考えておる？」

「いや、別に何も」

「……」

しばらく沈黙が続いた後、

「あの街、いつか滅びるんだよね……きれいな街だった。緑も多いし、ご飯もおいしかった。でも、もうすぐなくなってしまうんだね。二才がいつもと変わらない表情でそう言った。

「人は自らの足で歩かねば、歩けなくなってしまう生き物なのかもしれない。それを放棄したあの街は、やはり滅びる運命なのだろう」「悲しい街だったね。発展を望み過ぎたがために滅びるだなんてさ」「二才の蒼い瞳が一瞬、若干の憂いを帯びて消えた。

「人とはそういうものだ」

「そういうものかな？」

「そういうものだ」

ローダーは草原の道をひた走る。次の街に向かって。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9050n/>

ヒトノス ~ The World Travelers ~

2010年10月28日06時48分発行